国際医療福祉大学 2013年1月31日発行 学校法人国際医療福祉大学 ☎0287-24-3000
http://www.iuhw.ac.jp/

「共に生きる社会」の実現をめざして

IUHW

vol. 92
January 2013

International University of Health and Welfare

新春のごあいさつ

高木邦格理事長
北島政樹学長・矢﨑義雄総長・金澤一郎大学院院長

卒業研究発表会

学生&企業研究発表会

特集1

新春のごあいさつ

国際医療福祉大学・
高邦会グループ 理事長
高木 邦格

二〇一三年を迎え、皆様にご挨拶を申し上げます。

国際医療福祉大学は開学より一七年が過ぎ、まもなく一八年目を迎えようとしており、節目となる二年後の創立二〇周年には記念行事も予定しております。また、この三月には福岡看護学部から待望の第一期生が誕生し、医療と福祉の現場へと羽ばたいていくこととなります。

日本初の医療と福祉の総合大学として開学以来、卒業生数は一万三千人を越えました。大変喜ばしいことに、昨年もまた各種メディアの就職率ランキングで私立大学として全国第一位を獲得することができたほか、『本当に強い大学特集』などでも大きく取り上げられました。この不況下、約一〇〇%という本学の就職率は、全国で活躍しているこれまでの卒業生や国家資格試験の合格率、質の高い教育力などをご評価いただき、多くの求人をお寄せいただいた賜物とあらためて感謝申し上げます。

この四月には、臨床検査技師を育成する「医学検査学科」が福岡県の大川キャンパスに開設いたします。これに伴い、学部名称も「福岡リハビリテーション学部」から「福岡保健医療学部」に変更いたします。私立大学として九州で三番目の設置となる本学科では、医療技術の進歩で高度化した従来のさまざまな検査のみならず、遺伝子検査などにも対応できる臨床検査技師の育成をめざします。隣接する高木病院や福岡市の福岡山王病院をはじめとするグループ関連病院で、最新の医療機器に触れながら充実した臨床実習を実施していくほか、教育陣についても医師や技師長クラスといった臨床現場の第一線で活躍する人材を招聘するなど、充実した布陣のもと、専門性の高い教育を行ってまいります。

また、三月には、国際医療福祉大学・高邦会グループ一〇〇周年事業の一環として、大川市に文化と福祉の複合施設である「地域貢献棟」（大川コミュニティセンター：仮称）の建設を開始いたします。質の高い幼児教育や病児保育などの子育て支援施設と高齢者の健康増進施設に加え、映画館やレストラン・書店なども併設した九階建ての当施設は、来年六月に竣工を予定しております。

附属・関連施設につきまして、まず関東地区においては、千葉の化学療法研究所附属病院が老朽化した結核病棟の建て替え工事を進めておりますが、七月に開設を予定しているこの新病棟では、結核病棟の療養環境を一層充実させるほか、新たに回復期リハビリテーション病棟を設けました。これにより、急性期から回復期・慢性期までの一貫した医療提供が可能となります。また、東京の山王病院につきましては、隣接する土地を購入することができましたので、夏前までには新築工事に着工し、来年中には地下二階・地上六階建ての新棟を完成させ、一九床の産科クリニック新設と現在の山王病院の産科・リプロダクションセンターの機能拡充、リハビリテーション室の移設などを予定しております。

国際医療福祉大学病院につきましては、昨年九月に栃木県北地域の悲願であった総合的な循環器疾患の診療と心臓の開心術を行う循環器センターを開設し、以来、この地域における多くの方々の循環器疾患に幅広く対応しております。国際医療福祉大学三田病院につきましては、新病院の開設からまもなく一年となりますが、外来・入院ともに順調に推移しており、東京都認定がん診療病院・東京都二次救急医療機関として、より一層あたたかく質の高い医療のご提供に努めてまいります。

九州地区の高木病院につきましては、本年六月から新たに八階建ての急性期棟（G棟）建設に着工いたします。竣工は来年八月を予定しており、手術支援ロボット「ダ・ヴィンチ」の導入やハイブリッド治療に対応する手術室の増室および救急外来の拡充、ICU（集中治療室）・HCU（高度治療室）の設置をはじめ、リハビリテーション部門の拡張と緩和ケア病棟も整備し、急性期の中核病院として今後さらに地域医療への貢献を図ります。

さらに医学部の新設につきましては、全国市長会が医学部新設による地域医療体制の充実を求める決議を採択し、政府に実現を要請したことなども踏まえ、本学でも引き続き積極的に検討を進めている所存です。

最後に、新たな一年が皆様にとって充実したよき年でありますことを祈念いたしまして、ご挨拶とさせていただきます。

国際医療福祉大学学長
北島 政樹

新春を迎え、一言、皆様方にご挨拶を申し上げます。二〇一一年三月一一日の東日本大震災の悪夢は今もって醒め遣らず、経済はデフレが続き、政界では国会解散・総選挙と、昨年は一年を通じて混沌とした状況が続きました。

世の中は不安定でありましたが、本学では教職員が一丸となり、それぞれが目的意識を持って行動し、着実な成果を上げてきたと自負いたしております。

まず、薬学部の六年制改変後最初の国家試験への挑戦でありますが、すべての教員の教育に対する熱意により、国家試験前の予備試験におけるCBT（Computer Based Testing）で常に全国一、二位の上位を占めていたので、私自身は安心しておりました。その結果、一二六名中一二四名が合格し、合格率九八・四%（全国平均八八・三%）と輝かしい成績でありました。これら好成績の背景には、教員の教育力もさることながら、白衣授与式による一体感や本学への帰属意識も大いに貢献していたと考えております。

また、本学が医療福祉の総合大学であるが故に、診断・治療機器を用いる特色を活かすために、医工・産学連携を推進してまいりました。すなわち、昨年二月に実施した第三回国際医療福祉技術情報交流会後に、車椅子体重計、介護用計量スプーン等、企業との連携による製品化、特許申請の面で着実に成果を上げてまいりました。さらに、大学の評価基準のひとつともいえる外部研究費、特に文部科学省、厚生労働省の両科学研究費の獲得は重要であります。

そのため本学では、研究協力センターから教員に対し情報提供を小まめに行い、さらに申請書の記載のノウハウを審査員、申請者の立場から毎年説明会を開催して説明してまいりました。その結果、教員の意識が高揚し、次年度に向けた申請数は文部科学省科学研究費が一二八件（前年比一三一%）、厚生労働省科学研究費が一五件（前年比二一四%）と着実な成果を示しました。

特に、大学教育充実のための戦略的大学支援プログラムにおいて、「仮想病院の構築」という課題で研究費を獲得いたしました。これにより、本学の教育の特色のひとつである「関連職種連携教育」において、薬剤処方や放射線診断システムを包括した電子カルテ教育が可能となり、教育の質の向上が期待できます。

このように、教育・研究環境・施設の充実とともに教育の質の向上をめざす一方で、教育・研究に関する情報を各キャンパスで共有するために、九月一日に「第二回国際医療福祉大学学会学術大会」を開催いたしました。

また今回は、関連職種連携実習報告会および文部科学省の「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン―高度がん医療開発を先導する専門家の養成プログラム」の一貫事業といたしまして、がん先端医療に対する多職種連携に関するシンポジウム を学会中に同時開催し、密度の濃い学会として評価されました。

このような学術的な試みと同時に、「社会に開かれた大学」の理念を実現するために、本年度の「第三回キッズスクール」は、福島県の一二名の中学生を招待して開催いたしました。栃木県の中学生とともに目を輝かせてシミュレーション手術に取り組み、お互いの交流を楽しんでおられたようでした。

さらに九月一七日の「敬老の日」には、六五歳以上のアクティブシニアを対象に「第二回幸齢者スクール」を開催し、八プログラムをゲーム感覚で楽しみながら実地体験していただきました。

両スクールの参加者全員に「修了認定証」を手渡しましたが、老若男女を問わず、実地体験をしたことによる感激を手の温かみから感じることができました。

さて、今年も毎日新聞社と共催で「高校生作文コンテスト」を開催いたしましたが、その趣旨が全国的に浸透したのか、昨年の一九四三件から本年は二二三二件へと大幅な応募数の増加がありました。すべての応募者が真摯な態度で医療福祉を理解し、自己体験から将来の医療福祉の専門職をめざす意気込みを示していただけたことは、主催者といたしまして望外の喜びでもありました。

多くの行事を行った本年度は、特に本学大学院の発展に尽力された開原成允前大学院院長の多大な功績を称える「記念シンポジウム」を九月二九日に開催いたしました。高木理事長が挨拶のなかで先生のお人柄と高い見識に触れられ、本学における「諸葛孔明」のような方という表現が的を射ており、印象的でありました。

最後になりますが、本学は基本理念に則ってグローバル化、情報化が進展する日本社会において後退することなく改革を推進してまいりました。しかしながら、大学を見る社会の目はかつてないほど厳しさを増していることを教職員は理解する必要があります。

中国の古典で、「終身の計は人を樹うるに如くはなし」と人材育成の重要性を述べておりますが、このような時代背景のなかでこの言葉を肝に銘じ、本年も皆様方とともに叡智を結集し、驕ることなく気を引き締めて本学の教育・研究の発展に努力する所存でありますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

新春のごあいさつ

国際医療福祉大学総長　矢﨑　義雄

本年も皆さんにとって良き年であります よう心よりお祈り申し上げます。そしてこの機会に、医療と教育の視点から、皆さんに是非二点を申し上げたいと思います。

まず、わが国が急速な人口の少子化と高齢化を迎えて、医療や介護、福祉を取りまく環境が大きく変化しようとしていることです。それは、六五歳以上の高齢者の占める割合が現在の二三%から、戦後の団塊の世代が後期高齢者となる二〇二五年には三〇%を超す超高齢社会を迎え、認知症を含めた介護を必要とする高齢者は、現在の六〇〇万人から二〇〇万人も増えるとされていることです。

それは、加齢に加えて、医学・医療の進歩により、感染症などを中心とした急性疾患の多くが克服され、生活習慣に起因して慢性に経過して決して治ることのない疾患が残されたからです。その結果、医療ばかりでなくケアを必要とする高齢者が著しく増加するところとなりました。今日までは病気を治すための病院が医療の中心的な役割を担ってきましたが、これからは、病んだ高齢者を受け入れる介護・ケアを地域で担う受け皿が必要となり、それが解決すべき社会的に大きな課題になっています。そして、その主な担い手となるのが、今、多職種にわたる医療職をめざして勉学に努めている皆さんなのです。

国際医療福祉大学は、四キャンパス六学部一五学科で、このように社会的ニーズがきわめて高い医療と福祉の専門職を育成する、わが国では最も大きな総合大学であります。本年四月からは大川キャンパスに、新たに臨床検査学科が新設され、これに加わることになりました。超高齢社会を迎えたわが国において、医療福祉を担う人材の育成は喫緊の課題です。本学はこのような社会的な使命を果たすべく、教育環境を整備するとともに優秀な人材を教授陣に迎え、きわめて充実したカリキュラムで教育を実施してまいりました。本学で学ばれ医療専門職として社会での活躍をめざされることは、必ずやその領域のリーダーとなって、来るべき超高齢社会の課題に立ち向かい、それを克服されるものと期待しています。

さらに言及したいことは、高齢社会による医療と福祉へのニーズの著しい増加に対して的確に対応するには、医療従事者の数の増加だけではなく、互いに専門の知識と技術を提供し合って患者さんに最も適切なサービスを行う、医療職種間の「チーム医療・チームケア」の実践が求められていることです。本学は医療と福祉の総合大学であることから、学びのはじめより職種間の連携を密にしたカリキュラムによる教育を重点的に実施しております。さらに、豊富な実習施設が備わっていることから、患者さんを介して実際の「チーム医療・チームケア」を実地体験もできるように配慮しております。このように恵まれた教育環境で学ばれた皆さんが、十年後の医療と福祉のニーズが高まるなかで、この領域のリーダーとして活躍されるものと確信しております。

本学では、卒業された皆さんが実地で働きながら、さらに専門性の高い知識と技術を修得されることを可能とした大学院も整備しております。各分野で修士・博士号を取得されて、活躍の場をさらに広げられますことを願っております。

新年にあたって、皆さんの一層のご活躍とご発展を心よりお祈り申し上げます。

国際医療福祉大学大学院院長　金澤　一郎

平成二五年の幕開けにあたり、皆様に一言ご挨拶申し上げます。

昨年は、福島第一原発事故による放射線被害への対応や東日本の津波被害からの復興への支援に明け暮れたように思います。一方、政治の世界では、遂に衆議院が解散になり、昨年の暮れには三年三か月を経て自民党が政権に返り咲きました。年明けからは第二次安倍政権が本格的に始動していますが、私はとにかく安定して落ち着いた政権であることを心から願っています。一年ごとに首相が替わって世界から信用されないことだけは、何とか避けて欲しいと思うからです。

さて、私は前大学院院長の開原成允先生が突然亡くなられた後、引き継ぎのないまま大学院院長を拝命してからすでに二年が経ちました。しばらくは戸惑うことばかりでしたが、最近になってやっと全体像が少し見えてきましたので思うところを少々述べてみます。

まず、大学院キャンパスについてです。

昨年三月までは大田原、青山、小田原、熱海、福岡天神、大川それに熊本という全国七か所に広がっていましたが、本年三月に熊本キャンパスが閉鎖されます。それはお役目が終わったからだと理解します。

大学院の体制については、約一年前から大学院院長、副大学院長、学事顧問、専攻主任および若手代表からなる大学院基本計画委員会を発足して検討を重ねています。まだ公表して皆さんのご意見を伺うことができる段階ではありませんが、春頃までには完成したいと思っています。主に直近の将来のことについて、まずは検討しています。例えばアドミッションとディプロマ・ポリシー、分野・領域の再編、国際交流などがその項目です。

次に、新しい分野や領域の立ち上げについてです。本年四月から大川の福岡リハビリテーション学部が、その名を福岡保健医療学部と変えたうえで、医学検査学科を新設することはすでにご承知だと思います。私は以前から、いわゆる臨床検査に携わる方々のキャリア・アップのために、大学院の分野あるいは領域を作るべきであろうと思っていました。ですから、学年進行を待たずに大学院を立ち上げることが可能であると聞いて、大変心強い思いをしています。現在、関係の方々の間で検討していただいているところです。その他にも、保健師養成も大学院として検討するべき課題の一つであると認識しています。

大学院が少し見えてきますと、修士号や博士号をどれくらいの院生が取得しているのかが気になり始めました。きっかけは、外国人留学生が博士課程に入学して博士号を取得した人が四割に満たないことを知ったことでした。それなら日本人の院生はどうかと考えて調べてみました。さすがに修士号は九割以上の院生が取得していましたが、博士号は四六%に過ぎず、満足してよい数字かどうか疑問です。勿論、基準を甘くして全員に博士号を、などと言っているのではありません。このままにしておいてよいのだろうか、という問いかけをしているのです。

最後に、本学大学院の特徴の一つに、学部との関係が希薄である点が挙げられることに関連して、今年の活動の方向性を述べておきたいと思います。ご承知のように、本学ではメディカルスタッフを多数育成しておりますが、卒業後はまず、現場である程度経験を積む人が多いと思います。その後に、志をもって大学院に回帰する人、あるいは他所で勉強した後に本大学院をめざす人等が集まってくれるのだと思います。ですから、ともすると学部ばかりが前面に出て、うっかりすると大学院のことが忘れられるということが起こります。そこで今年は、二つのことを実行しようと考えています。

大学院をめざす人達に本大学院のＨＰを見て集まってくれることが多いことに鑑み、一つはＨＰを一新すること、もう一つは積極的にメディアなどで大学院の宣伝をすることです。どうぞご支援の程、よろしくお願い申し上げます。

International University of Health and Welfare
IUHW
vol.92
January 2013

CONTENTS

特集1 新春のごあいさつ
2 ・高木邦格　国際医療福祉大学・高邦会グループ 理事長
3 ・北島政樹　国際医療福祉大学学長
4 ・矢﨑義雄　国際医療福祉大学総長
・金澤一郎　国際医療福祉大学大学院院長
6 **特集2** 卒業研究発表会
7 **特集3** 学生＆企業研究発表会

キャンパスレポート
8 第25回 小田原キャンパス
9 第15回 福岡天神キャンパス
10 第29回 大川キャンパス
11 第7回　塩谷看護専門学校
湯布院セミナーハウスにて　教員のOSCE研修会を初めて開催

施設インフォメーション　新春のごあいさつ
12 国際医療福祉大学病院 病院長　蘇原 泰則
国際医療福祉大学塩谷病院 病院長　江口 光興
国際医療福祉大学三田病院 病院長　小川 聡
国際医療福祉大学熱海病院 病院長　寺岡 慧
13 国際医療福祉リハビリテーションセンター センター長　下泉 秀夫
新宿けやき園 常務理事　杉原 素子
化学療法研究所附属病院 病院長　西野 卓
高木病院 病院長　岩坂 剛

施設インフォメーション
14 国際医療福祉大学病院・自動精算機導入で待ち時間短縮!／
国際医療福祉大学三田病院・チョーライ病院の病理医が視察に来訪／
附属病院・グループ病院から多くの医師が「Best Doctors in Japan」に選ばれています

トピックス
15 大田原市長と留学生の懇談会／
JICA本邦研修を大田原キャンパスで受け入れ／
元培科技大学（台湾）の留学生が視機能療法学科に!／
国際交流親善パーティ
16 第15回学長杯英語スピーチコンテスト開催／
継続する被災地支援活動～東日本大震災を忘れない～
17 第36回日本高次脳機能障害学会を開催
「研究と臨床の統合：未来への展開」／
第3回「共に生きる社会」めざして　高校生作文コンテスト表彰式開催

18 卒業生通信
19 大学院・医療福祉ｅチャンネル

20 学生投稿ページ

卒業研究発表会

視機能療法学科

一二月二二日、卒業研究発表会が開かれた。この発表会には三・四年生全員が出席したのみならず、多くの一・二年生の姿も見られた。今回は、四研究班から計八件の研究が発表された。テーマは、「モノビジョン法による視機能矯正の視覚誘発電位に及ぼす効果」、「重症心身障害児・者のための他覚的視機能検査の確立を目指したキャラクター刺激に対する視覚誘発電位の検討」、「視聴覚刺激に対する認知・予測事象の事象関連電位による検討」、「感情喚起写真に対する視覚皮質の活動の近赤外線分光法による検討」など視覚における脳活動を指標としたものから、最近流行の「3D映像視聴の眼に及ぼす影響」、「瞳孔変化に及ぼす情動性聴覚刺激の影響」、「眼圧変動の要因を探る検討」、「深視力の訓練効果」などであった。このように多彩な研究手法と意欲的な問題意識が伺え、いずれも劣らず、努力の跡がみられた発表であった。討論では、三年生から多くの質問が積極的に出され、来年度卒業研究を担う学生の姿勢を垣間見た気がする。一・二年生にとっては難しい内容であったが、将来の自分の姿を重ねたにちがいない。卒業研究は、自らがデータの持つ意味を説明しなければならない活動であり、こうした経験は卒業後の臨床の場で生きてくるものと確信する。

（教授　靱負正雄）

放射線・情報科学科

平成二四年度の放射線・情報科学科の卒業研究発表会が一〇月二七日に開催された。一四演題の口頭発表と、八二演題のポスター発表があり、一年生から四年生まで、参加者は四〇〇名を数え、研究の成果を発表する場として盛況な会となった。どの発表もこれまで積み重ねてきた努力の成果が現れた内容であり、質疑応答では自分の主張、考えをしっかりと伝え、活発な議論がなされていた。

当学科の卒業研究発表会は学生主体での実施が伝統となっており、発表会の準備、会場の設営、発表会での司会・座長など、すべてを学生が自ら手がけた。苦労もあったことと思うが、多くのことを体得し有意義な経験ができたものと感じている。

特に優れた発表として、次の各人に発表優秀賞が授与された。

【口頭発表】
深谷紀元、吉澤知穂

【ポスター発表】
小濱達也、矢口静乃、吉田昌弘、黒川有紀、宮崎加奈子、佐藤誠也、伊藤彩乃

発表優秀賞受賞者は、本年三月に行なわれる栃木県放射線技師会主催の学術研究発表会で発表を行なう予定である。

（講師　小池貴久）

薬学科

九月一一日に、薬学科の卒業研究発表会が0棟一階ロビーで行われた。

一年半の卒業研究の集大成として、各自がポスターを作成し、その前で三分間の発表を行った。発表の後は、興味を持った学生と教員から多数の質問があり、活発な討論が行われた。

一一月に研究室の配属が決まる四年生や、Ⅱ期の実務実習に行っていない五年生も先輩たちの発表をしっかり聞いていた。

最後に旭満里子教授から総評をいただき、卒業研究発表会は成功裡に終了した。

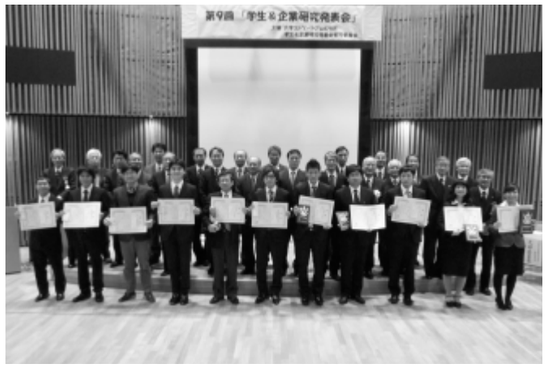
（准教授　徳村忠一）

●活発な討議

●発表後（製剤学研究室）

第九回 学生&企業研究発表会

一二月八日、栃木県宇都宮市のとちぎ産業創造プラザで「第九回学生&企業研究発表会」が開催された。この催しは、大学コンソーシアムとちぎが主催し、社会貢献・地域貢献をテーマに、「ものづくり」、「食・農・環境」、「人文社会経済・芸術」、「医学・医療福祉」の四つの分野で学生主体の研究発表を行う栃木県独自の取り組みである。



午前中に行われた分野別の発表審査会に続いて、午後は各賞の選考会と表彰式が行われた。

本学からは「食・農・環境分野」に一チーム、「医学・医療福祉分野」に五チームがエントリーした。最優秀賞（知事賞）は「食・農・環境分野」から「T7バクテリオファージを用いた蛍光ナノバイオプローブの開発」を発表した宇都宮大学の学生が受賞したが、本学の六チームもよく健闘し、「医学・医療福祉分野」で金賞・銀賞を独占したほか、協賛機関の冠賞のひとつである「栃木県経営者協会賞」を受賞した。

【医学・医療福祉分野】

金賞
情動的ストレス抵抗性形成におけるエピジェネティクス制御

薬学科五年
・篠加奈子（発表者）
・榎戸雄紀　・五月女舞衣　・土屋翔

●表彰を受ける篠加奈子さん

栃木県経営者協会賞
ストレス適応障害に対する選択的5-HT1A受容体作動薬flesinoxanの改善効果

薬学科五年
・松島徹（発表者）
・阿久津真希　・矢谷彬浩

●表彰を受ける松島徹さん

銀賞
大田原市特産ウドに含まれるクロロゲン酸類を配合する「与一くんウド飴」の開発

薬学科五年
・神長美帆（発表者）
・橋本竜　・伊藤悠　・池田俊宏
・伊藤美紀　・井上龍亮　・大橋昂人
・水越千晶

奨励賞
食事に箸置きを取り入れる行為が咀嚼回数に及ぼす影響

言語聴覚学科四年
・橋本千尋（発表者）
・梅宮彩香　・山口瑞紀

奨励賞
3D映像視聴前後のCA/C比の変化

視機能療法学科四年
・佐藤麗（発表者）
・石川由佳　・伊藤可奈子　・河又梓
・髙見澤千穂　・立津優里　・南雲彩加
・長谷川可明　・山中愛香

【食・農・環境分野】

奨励賞
飲酒が健康に及ぼす影響～動物実験による評価法およびその展望～

薬学科五年
・菊地啓太（発表者）
・近藤常勝　・鯉沼悟史

（受賞者敬称略）

（大田原キャンパス　総務課）

第25回
小田原
キャンパスレポート

第七回スポーツ大会

一二月一日、寒空の下、小田原市立城山中学校のグラウンドをお借りして、第七回スポーツ大会が開催された。城山中学校のグラウンドをお借りしての開催は、今回で三回目を迎える。

●少ない時間の中で開催まで全力で準備した実行委員会

開催当日の朝は雨模様で、屋外での開催が危ぶまれる場面もあったが、学生の願いが天に通じたのか、直前には打って変わったかのように晴天。学生委員長の菅原洋子先生にご挨拶いただき競技開始。競技内容は、ドッヂボール・大縄・サッカー・何でもリレー（障害物リレー）と、例年は競技性が高く、限られた学生のみが参加できる種目の割合が高かったが、今年度の競技種目は、『**より多くの学生が参加できるように**』とスポーツ大会実行委員会（実行委員長　PT二年・山口ゆいさん）が検討し、実施した。

●ドッヂボールでの勝利を記念して、参加してくれた先生を胴上げ!!

●２年生にもなると、練習なしでも息もピッタリ

競技に参加したのは学生だけではない。救護担当として参加していただいた先生もドッヂボールに飛び入りで参加し、学生と一緒に汗を流した。

一〇月に開催された潮風祭から一か月半と短い時間をフル活用し、開催まで尽力したスポーツ大会実行委員会メンバー。そして、学生生活を送る中で、あまり屋外で運動する機会のない学生が、全力で競技に取り組む姿。普段キャンパス内で見ることのできない一面を垣間見ることができた。

潮風祭、スポーツ大会を通じてより一層学生間の団結力が増したように思える。

総合順位

一位　理学療法学科一年
二位　看護学科一年
三位　作業療法学科一年

（学務課）

小田原市との災害時における協定を締結

一一月二七日、本学小田原キャンパスと小田原市は、「災害時における帰宅困難者支援に関する協定」を取り交わした。この協定は、地震などによる災害が発生した場合、小田原キャンパスの体育館を市内の帰宅困難者の避難場所として提供し、支援するというもの。

小田原キャンパスで行われたこの協定締結式には、本学の高木邦格理事長と小田原市の加藤憲一市長が出席された。加藤市長からは、昨年の東日本大震災発生時に小田原キャンパスを開放したこととあわせて、今回の協定締結にも感謝の意を表明いただいた。

高木理事長は、東日本大震災の際、大田原キャンパスやグループの他の医療機関でも大きな被害を受け、自家発電設備が整っていなかった施設もあったことを踏まえ、災害発生時に向けて備品や食料を備蓄するようにしたこと、さらに消防等の専門家を職員として招き防災対策の組織作りを行ったこと、グループ全体における防災対策の構築に力を注いできたこと、などに言及された。

また、本学附属の熱海病院は伊豆半島唯一の免震構造の病院で、小田原市や静岡地域における災害時の医療拠点として対応することができることにも触れ、今後は小田原市立病院との連携なども図れるよう協議していきたいと言及された。

（総務課）

●協定を取り交わし、固く握手する加藤市長と高木理事長

第15回
福岡天神
キャンパスレポート

島民になって実習！ 種子島・上五島

今回は、初めて挑戦した島での地域看護学実習についてレポートする。

まずは、鹿児島県の種子島・南種子町へ

海外研修の余韻冷めやらぬ九月はじめのまだ暑い日、鹿児島港から高速船で種子島の西之表港に到着した。そこから、南へまっしぐらに車で走ること一時間半。種子島の最も南に位置する南種子町が今回の実習地である。南種子町は人口約六千三百人の小さな町だが、あのＪＡＸＡ（宇宙航空研究開発機構）のロケット発射場がある。高齢化率三一・五％（平成二二年）、出生率七・五、死亡率一一・五（いずれも人口千対）と少子高齢時代を先取りした地域である。

実習では、特定健診、乳児相談、発達障害児相談、介護予防事業、家庭訪問など数多くの事業を体験した。

健康教育では、介護予防教室の中で「健口体操一・二・三」と題し、口腔体操を実施した。早口言葉を取り入れ、体操の前後で比較し、早口言葉が早くなることを証明しようと試みたところ、島民の方が学生より早く発音され、びっくりするやらがっくりするやら（苦笑）。それでも熱心に耳を傾けていただき、最後は盛大な拍手までいただいた。

●健口体操！１・２・３！学生２名奮闘中

実習合間の休日には、地区踏査を兼ねた観光地巡り。青い海が惜しげもなく広がり、ＪＡＸＡの宇宙技術科学館では本物のロケットを見学し、鉄砲が伝来した門倉岬から屋久島に沈む夕日を眺め、島特産の安納芋をほおばった。島は台風の通り道のため、台風に強いサトウキビ畑や芋畑が広がり葉タバコも生産され、果樹はほとんどなかった。健康問題として、肺がんが突出しており、課題の分析をしたところ、町の保健師さんから、お手紙をいただいた。

『**あきらめかけていた肺がん問題に再トライする糸口や、予防接種の重要性に気づかされました。実習中はもとより（学生の）記録を見ながら私自身を含め職員一同元気をいただき、自分たちの仕事を振り返り再確認するよい機会となりました。ありがとうございました。**』

手紙に最敬礼し、感動を新たにした。

次に、長崎県五島列島の新上五島町へ

一〇月中旬に向かったのは、長崎の西に浮かぶ五島列島の新上五島町。博多港を夜の一一時半に出港し、翌朝六時に新上五島町の青方港に到着した。

新上五島町は七つの有人の島と六〇の無人島があり西海国立公園に指定された平野の少ない景勝地である。人口は約二万二千人、高齢化率は三三・四％、出生率五・二、死亡率一五・〇と南種子町よりさらに少子高齢多死地域である。実習は、三歳児健診、特定健診、介護予防事業、育児支援センター、発達支援センター、思春期ふれあい事業（高校生と乳幼児）、家庭訪問と充実した内容だった。

島内に宿泊し、毎日、島民と同じ店で買い物をし、近所の飲食店で顔なじみの方もできた。特定健診を受診に来た方に、釣りのポイントを教えてもらい、実習合間の休日には男子学生二名は釣りの実践もした。まさしく島民となって過ごす中で、買い物の不便さや坂道の多さ、野菜の少なさ、炭水化物・イモ類で満腹感を得る生活での糖尿病の多さを実感した。一方では、人と人のつながりの強さ、育児をご近所で支えあっている団結の強さなど、ソーシャルキャピタルの豊かさも羨ましく感じられ、学生自身が住むわが町を振り返り、考えを深めた。帰る日には、役場の職員の方々をはじめ、旅館の女将さん、近所の飲食店のおじさん、おばさんからも『また、島においで』と声をかけてもらい心温まる充実した実習となった。

●新上五島町庁舎前。実習終わったー!また来るよ!!

南種子町・新上五島町とも、島に泊まり込み、島民となって実習を体験し、実習時間だけでなく、地域に暮らす人々の生活に触れ、それを看護する意味を深くとらえる実習となった。島の皆様方に心から感謝いたします。

（准教授　池田佐知子）

建陽大学の金容徳教授 本学での研究活動を終え帰国

本学と「学術教育交流に関する協定」を結んでいる韓国・建陽（コニャン）大学の金容徳（キム・ヨンドク）教授（建陽大学図書館長、同大学金熺洙総長令嬢）は、昨年四月から本学の客員研究員として福岡天神キャンパスを拠点とし研究活動にあたっていたが、この度、帰国となり、一月二二日、金出副学長などの出席のもと、送別会が開催された。

両大学の交流としては、昨年八月に本学の学生七九名が二週間にわたり建陽大学を訪問。それを受けて本年一月から二月、建陽大学の物理治療学科、作業療法学科、看護学科の五三名が本学を訪問し、日本の医療福祉への理解を深めるとともに、学生間の交流を行うなど、年々着実にその成果をあげている。

●金出副学長から金教授へ花束の贈呈

一〇か月の滞在期間中、金教授にはこれらの研修プログラムに的確な助言と提案をいただいた。自らは、図書館や博物館などの文化施設を積極的に訪問し、日本文化への理解を深める一方、福岡山王病院、高木病院、水郷苑など本学のグループ関連施設の見学等を通じて医療施設への見識を深められた。

（九州地区広報室）

第29回 大川 キャンパスレポート

韓国・建陽（コニャン）大学から物理治療学科教員一名と学生一九名が来日！

平成二五年が本格的に始動した一月七日、大川キャンパスに、韓国の建陽（コニャン）大学（大田市）より、物理治療学科一九名（一年生七名、二年生一二名）及び引率教員一名が、施設見学と学生間交流を目的として二週間の予定で来日した。本年度より、関連施設での実習の便や学生間の交流を活発化するねらいで、宿泊拠点を大川キャンパスに隣接する関連病院の宿泊施設とした。

●韓国からの研修生一行

来日初日は、博多港から本校に直行した学生及び教員に対し、大川キャンパスで軽食をとりながらオリエンテーションを行った。翌日は、朝九時より研修をスタートさせ、一一時より金出副学長・学部長、黒澤理学療法学科長や理学療法学科の教員出席のもとで、歓迎祝賀会が行われた。

この研修の狙いは、リハビリテーションを学び始めた韓国の学生に、日本のリハビリテーション現場の見学や同年代の本学学生との交流を通じて、日本と韓国の医療現場の相違点を学ばせるとともに、将来における日韓のリハビリテーション分野での互恵関係の礎を構築することと考える。したがって、本研修では、日本の医療福祉や理学療法についての特別講義、高木病院をはじめとする本グループの各施設の見学を通じて、日本の医療現場における急性期から維持期の理学療法について理解を深めてもらう予定である。

一方、本学の学生たちとの交流の一環として、休日に大川市や福岡市の歴史探索を行うことや、餅つきやたこ焼き、お好み焼きなどの日本の食文化を体験し、同じ志を持つ学生同士が心ゆくまで交流できるプログラムを考えている。さらに、帰国前日には修了式を行い、金出副学長・学部長より学生各人に修了書を手渡すことにしている。

●話が弾む歓迎昼食会

本年度は、一月二一日から、建陽大学の作業治療学科三年生と仁済（インジェ）大学（金海市）の物理治療学科、作業療法学科の三年生が臨床実地実習と学生間交流を目的として四週間の日程で、さらに二月四日からは建陽大学の看護学科二年生が施設見学と学生間交流を目的として二週間、来福の予定である。この来福に合わせて、理事長出席のもと、歓迎セレモニーを福岡山王病院内の山王ホールで行い、日韓大学間交流のよりよい発展をめざす。

（九州地区国際交流委員長　後藤純信）

関連職種連携論・連携ワーク発表会

すでに大田原キャンパスで開講され発表会も行われている「関連職種連携ワーク」の発表会を、一二月二二日に、初めて福岡リハビリテーション学部で開催した。

医療が複雑化する中、我々医療関係者にとって、他職種の専門性や役割を理解し、かつ自らの職種内容を他職種に向けてわかりやすく発信することが求められている。本年度は、二年次に開講されている「関連職種連携論」の講義の一環として、チュートリアル形式の問題解決型学習「連携ワーク」とその発表会を行った。連携論の座学講義終了後、三学科横断で八～九名の小グループを二〇組編成し、カリキュラム委員が作成した六事例のうち、事前に割り当てられた一事例を通して、リハビリテーションに関連した医療やケアに関する問題発見から、解決方法と三学科連携のあり方について討議した。教員（医師とPT・OT・ST）を一グループに一～二人チューターとして配置し、討議進行に疑問が生じたときのみ指導を行い、最終的な学習成果を理論化してまとめ発表を行った。発表会の司会進行も、学生主体で行わせた。

●熱心に聞き入る学生たち

本発表会では、大半の学生が「関連職種連携論・連携ワーク」の意図をきちんと理解して発表に臨んでおり、他のリハビリテーション職種の専門性や役割と自らの専門性を踏まえた情報共有のあり方、患者のニーズに合う目標設定や連携のあり方などを熱心に議論していた。一方で、まだ医学的知識や専門的技術を完全に修得できていない学生もおり、討議に参加すること自体、困難であった者もいた。また、今回は、大田原キャンパスのような幅広い職種間での連携ワークを行うことができなかったため、発表がリハビリテーション職種間での連携に限局されたものになった。

これらの点を踏まえ、教育側としては、今後医学検査学科も新設されることもあり、福岡看護学部や隣接する高木病院の研修医などにも参加を呼びかけ、より内容のある講義・演習となるようにしなければならない。このような改善を繰り返すことでこの授業の重要性が増し、学生が主体的に医療福祉を学習し、他職種と問題を共有しながら解決していく実際の医療現場にも役立つ授業になると思われる。

（教務委員・カリキュラム担当　後藤純信）

●金出副学長より修了書を受け取る学生

第7回 塩谷看護専門学校 キャンパスレポート

去る一二月七日、一年生四二名の「看護の誓いの式」が行われた。この式は看護を志す学生が、看護の象徴であるナースキャップを戴き、看護の心を象徴する灯をナイチンゲール像から受け継ぎ、看護の道へ進む決意を新たにする厳粛な式であり、本校では第七回目となる。時代の流れとともにナースキャップからコサージュへと変化しているが、看護の心はしっかりと受け継がれている。

この式のため、一年生は一〇月から昼休みや放課後に、ナイチンゲール誓詞やキャンドルサービスの練習を重ねてきた。当初は、ナイチンゲール誓詞を覚えることや灯りを絶やさないことに集中していた学生たちだったが、しだいにナイチンゲール誓詞のひとつひとつの言葉に込められた想いと自分の心の中にある看護への想いが触れ合い、重なり合ってきた。そして、式では、看護に対する責任や使命、決意をナイチンゲール誓詞の言葉に重ねて決意を誓った。その凛とした表情と姿に、保護者の皆様からは感極まったご様子が見受けられた。

式の後には、U.N.Limitedの製作スタッフ代表・今泉文子様をお呼びして、「病気は回復過程である。ナイチンゲール『看護覚書』より」の映画鑑賞と特別講演が行われた。「看護の誓いの式」の後だけに、ナイチンゲールの功績とナイチンゲールが述べている看護を心に深く刻む機会となった。また「**看護覚書は読み込むほど、看護を重ねるほど、この価値がそれぞれの中で分かってくる**」との言葉に、深くうなずいている学生の姿が印象に残った。保護者の方々も「看護の誓いの式」の感動の余韻の中で、わが子がめざす看護の責任と使命を知る機会となり、「参加してよかった」との言葉が聞かれた。

（益子久江）

湯布院セミナーハウスにて 教員のOSCE研修会を初めて開催

国際医療福祉大学・高邦会グループの教員のためのOSCE（オスキー＝客観的臨床能力試験）研修会が、一一月二三、二四日の二日間にわたり、昨年八月に開設した湯布院セミナーハウス（大分県由布市）にて行われた。

大田原・小田原・大川の三キャンパスならびに、姉妹校である専門学校柳川リハビリテーション学院、福岡国際医療福祉学院の五校の理学療法学科、作業療法学科、言語聴覚学科、視機能療法学科の教員七六名が参加しての大がかりな宿泊研修は、当グループとしては初めてのこととなった。

研修初日は、まず、金出英夫副学長の挨拶に始まり、次に丸山仁司保健医療学部長により研修の趣旨が説明された。その後、大川キャンパスの濱本邦洋教授による「医学教育における臨床研修とOSCE」の講義が行われた。濱本教授は、医学部の教育の変遷をたどり、現在、全国統一の共用試験に組み込まれたOSCEの課題などを示した。

●講演する濱本教授

引き続き、大田原キャンパスの森田正治准教授が「OSCE導入についての提案」をテーマに講義。森田准教授は、教員の役割はコーチングに移行しているという時代背景の中で、保健医療教育分野のOSCEについて検証し、学生への効果的なフィードバックの具体例などを挙げた。

●森田准教授はOSCE導入について具体的な提案を行った

翌日は学科ごとに分科会が行われ、OSCEを含めて、学生教育に対する熱心な討議が交わされた。最後の全体会では、福岡国際医療福祉学院の満留昭久学院長が「教員からの情報が生きるかどうかは、我々が学生を育てていこうというパッションにかかっています」と総評を述べた。また、「次回は、グループ施設の臨床現場からも参加して欲しい」（丸山学部長）という要望も上がるなど、次回の研修会実施の動きが早くも感じられた。学生教育への思いを新たにした二日間となったようだ。

（九州地区広報室　原田ちはる）

●施設インフォメーション／新春のごあいさつ

附属病院

国際医療福祉大学病院

病院長　蘇原　泰則

東北大学卒、医学博士。前自治医科大学外科学大講座主任教授。元日本呼吸器外科学会会長・理事・終身指導医。

当院にとりまして、二〇一二年はさまざまなことに取り組み、前進できた一年でした。近隣に那須赤十字病院が開院しましたが、上半期の一日平均入院患者数は前年同期比一〇七%、一日平均外来患者数は同一〇六%となりました。医療は人が人を診る仕事です。優れた医療スタッフの存在なしに病院の発展はありえません。職員の皆さんの地域医療の充実に向けた熱心な取り組みが、この成果をもたらしたものと受け止めております。

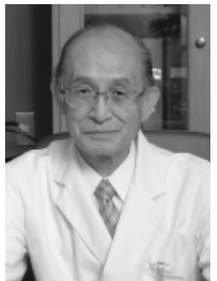
二〇一三年は、県北の悲願であった心臓手術の行える循環器センターが本格稼働し、消化器センターや代謝内分泌科、NICUの整備も進みます。さらに、心臓カテーテル室の増設や手術支援ロボット「ダ・ヴィンチ」の導入も予定されております。これらを起爆剤として、さらなる飛躍の年にしたいと考えております。

本年もよろしくお願い申し上げます。

附属病院

国際医療福祉大学塩谷病院

病院長　江口　光興



信州大学卒、医学博士。獨協医科大学名誉教授。前獨協医科大学小児科教授、日本小児科学会専門医。

厚生連塩谷総合病院を継承して国際医療福祉大学塩谷病院となってから、早いもので五年目に入ろうとしております。入院患者数二五人から出発しましたが、それが今では一日一六〇人を超え、外来患者数も一日六〇〇人を超えるまでに充実いたしました。昨年からは、回復期リハビリテーション病棟が三六五日体制となり、訪問リハビリテーションを実施するに至りました。これもひとえに院内スタッフのみならず、大学をはじめとするグループ全体のご尽力はもとより、医師会の先生方のご支援、ご協力の賜物と深く感謝いたしております。

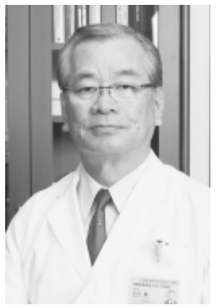
今後も急性期から慢性期まで、幅広い病期に対応できる病院として、地域医療に貢献していく所存でございます。

改めまして、今年もご指導ご鞭撻賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

附属病院

国際医療福祉大学三田病院

病院長　小川　聡



慶應義塾大学卒、医学博士。慶應義塾大学名誉教授、元日本循環器学会理事長、元日本心臓病学会理事長。

待ち望んだ新病院での診療が昨年二月一三日に始まりました。一、地域に愛され、二、専門性に基づく高度医療の提供、三、予防医学の重視、四、国際的に開かれた病院、の目標を立てました。特に「おもてなしの気持ち」は医療過密地域にある当院の生命線です。院内へ入った瞬間から優しい雰囲気を感じられるよう、全職員への指導を徹底してまいりました。患者様の評価は日ごとに高まっています。

五月からは金沢大学の渡邊剛教授をお迎えして心臓外科手術が始まり、さらなる高度医療のご提供が可能になりました。予防医学重視は基本コンセプトです。区民検診に当院を選ぶ方が急増し、地域医療へ貢献しております。また「国際性」こそは、新年度においても当院の柱です。当地域で働く外国人にもかかりやすく、かつ医療面で信頼できる病院をめざします。

グループのフラッグシップとしてさらに発展を遂げる年にしたいと存じますので、本年もよろしくお願い申し上げます。

附属病院

国際医療福祉大学熱海病院

病院長　寺岡　慧

東京大学卒、医学博士。東京女子医科大学名誉教授。前日本移植学会理事長。日本外科学会指導医・専門医、日本透析医学会指導医・専門医。

当院はこれまで、消化器センターおよび脳卒中・神経センター、血液浄化センターおよび回復期リハビリセンターの開設など、地域中核病院としての機能を拡充してまいりました。本年は放射線診断部門の拡充、同治療部門の新設、血液浄化センターおよび予防医学センターの拡充、病床の増床、急性期から回復期、さらに在宅までのシームレスなチーム医療を提供すべく、訪問看護、訪問・通所リハビリへの取り組み、男女共同参画を推進するための託児所の拡充、駐車場の増設などをめざし、いよいよ新棟建設に着手する予定です。

この新棟建設は、近未来の前立腺センター、皮膚疾患治療センター（仮称）、アイセンター、肉腫センター、臓器移植センター（膵及び肝移植施設認定）などセンター化構想に基づいた総合メディカルセンターへの発展の鍵を握る最重要課題と位置づけております。皆様のご理解とご支援をお願い申し上げる次第です。

●施設インフォメーション／新春のごあいさつ

臨床医学研究センター

国際医療福祉リハビリテーションセンター

センター長　下泉　秀夫

徳島大学卒、医学博士。元栃木県身体障害医療福祉センター医務科長。国際医療福祉大学大学院教授。

本学大田原キャンパス内に、国際医療福祉リハビリテーションセンター、おおたわら総合在宅ケアセンター、特別養護老人ホーム「風花苑」、情緒障害児短期治療施設「那須こどもの家」があります。老若男女が入・通所、外来診療に訪れ、卒業生が医療福祉の専門職として活躍しています。また、延べ三千人以上の学生が毎年実習で訪れ、先輩の指導を受けています。昨年七月には、学生・近隣ボランティア百人以上の協力を得て、恒例の各施設合同の夏祭りを開催しました。

今年九月には、宇都宮市で「第三九回日本重症心身障害学会」を主催します。同学会は、故・大谷藤郎初代学長が厚生省時代に設立し、大会長や名誉会長を務められました。今年は、ロボットスーツHALの開発者である山海嘉之先生と新井田孝裕視機能療法学科長が特別講演をします。また、障害者の手織工房の協力を得てファッションショーも行います。

今年もよろしくお願い申し上げます。

臨床医学研究センター

新宿けやき園

常務理事　杉原　素子

お茶の水女子大学院修士課程修了。米国作業療法士資格取得。前日本作業療法士協会会長、国際医療福祉大学副学長。

新宿けやき園は、新宿区百人町にある高齢者支援施設と障害者支援施設を併せ持つ社会福祉施設です。

新宿けやき園が提供しているサービスは、これまでもこれからも、新宿という地域社会の発展に欠かすことのできない大切なものです。家族との生活が様々な理由で困難になった高齢の方々や障害を有する方々に、住み慣れた馴染みのある地域で、十分な広さの個室と、必要な介護と、その人にとっての精一杯の豊かな生活を、ご家族とともに考えながらご提供します。

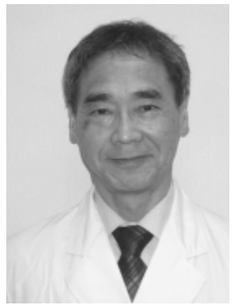
今年も地域社会に密着したさまざまなサービスを創出しながら、職員一同、ご利用者・ご家族の皆様とともに歩み続けます。

今年もどうぞ、よろしくお願い申し上げます。

臨床医学研究センター

化学療法研究所附属病院

病院長　西野　卓



千葉大学卒、医学博士。千葉大学名誉教授。前千葉大学医学部麻酔学講座教授、日本麻酔科学会指導医。

二〇一二年四月に病院長に就任してから初めての新年を迎えることになりました。さて、化学療法研究所附属病院（通称：化研病院）は、千葉県内で結核治療を行う数少ない病院です。しかし、近年は結核患者の減少とともに病院の性格を変え、新しい病院として発展しつつあります。現在、敷地内に結核新病棟を建設中であり、七月からは新しい病棟での治療が行われる予定になっています。また、これを機会に、診療内容の大幅な充実化を図り、一般病床の増床、回復期リハビリテーションの開設も予定しています。

化研病院は小粒ですが、結核のみならず成人病からがんまで、幅広い高度な治療が行える病院として、さらに療養病棟を備え持つユニークな病院として今後の発展が期待されています。この期待に応えるように、職員一同、同じ目標をもって邁進したいと思っています。

どうぞ、本年もよろしくお願い申し上げます。

臨床医学研究センター

高木病院

病院長　岩坂　剛

九州大学卒、医学博士。佐賀大学名誉教授、日本癌治療学会代議員、日本臨床細胞学会副理事長。

昨年四月一日に医療法人社団高邦会・高木病院の病院長に就任いたしました。就任後、約九か月になりますが、本院の活動状況を目の当たりにし強く感じたことは、最新鋭の診療機器の装備もさることながら、救急医療を含め地域に密着した診療体制ができあがっていることでした。もちろん、そこに関わる献身的なスタッフに支えられたものではありますが、十二分に機能しており、地域住民への貢献は計り知れないと思われます。

加えて、心臓血管外科開設一周年が過ぎ、診療体制が定着してまいりました。一〇月からは肺手術も加わり、さらに充実しております。今年度の目玉は、新棟建設に伴う手術支援ロボット「ダ・ヴィンチ」の導入、救急外来、手術室、ICU・HCUの拡充です。さらに、放射線部に最新のリニアックを装備し、久留米大学の早渕現教授を招聘して、放射線治療部門の充実を図る予定です。

今年もどうぞ、よろしくお願い申し上げます。

●施設インフォメーション

附属病院 国際医療福祉大学病院

自動精算機導入で待ち時間短縮！

国際医療福祉大学病院では会計待ち時間の短縮を目的として、九月末にグループ施設では初となる「自動精算機」を二台導入した。

外来患者数の増加を背景に、導入前は午前中の診察が終わる一一～一二時頃をピークに、会計前に長い行列ができてしまうという問題を抱えていた。

自動精算機導入により、行列ができるという問題は解消され、平均で約二〇分あった会計待ち時間（診察が終了した時点からレジに入金されるまでの時間）は一〇分にまで短縮された。精算機の近くには案内係を配置し、患者様の誘導や操作方法の説明にあたっている。

現在のところ、外来診療費の現金払いのみ取り扱っているが、将来的にはカード払いへの対応や精算機の増設などを検討し、一層患者サービスの向上に努めていきたい。

（総務部）

附属病院 国際医療福祉大学三田病院

チョーライ病院の病理医が視察に来訪

一二月一二日、ベトナム・ホーチンミン市にあるチョーライ病院の病理主任であるDr.Tran Minh Thongと若手病理医のDr. Pham Quang Thongが、三田病院の病理診断センターを視察された。

南ベトナム最大の基幹病院であるチョーライ病院と本学は、学生の海外研修や留学生の受入れなど永年にわたり友好関係にあり、Dr.Tran Minh Thongは二〇一一年の経済産業省のプロジェクト「遠隔病理・画像診断によるアジアの医療支援」の実験を行った際のベトナム側の病理を担当された。分子病理診断室、テレパソ室などを備えた新しい病理診断センターに感銘を受けたDr. Pham Quang Thongは、しばらく滞在して勉強したいと強い意向を示された。

その後、高木邦格理事長を表敬訪問し、高木理事長より今回の訪日の目的について質問されるなど、和やかな雰囲気のうちに訪問は終了し、その後、山王病院も視察された。

今回の来訪を受け三田病院・病理診断センター長の長村義之教授は、「短い期間ではありましたが、本学と友好関係のあるアジアの友人と一緒に時間を過ごせたことは極めて有意義でした」と述べた。

（総務企画課）

附属病院・グループ病院から多くの医師が「Best Doctors in Japan」に選ばれています

医師に対し、「もし、自分または家族が自分の専門分野で病気にかかった場合、自分以外のどの医師にその治療を依頼するか」というアンケートを行い、治療能力・研究成果・最新医学情報への精通度を考慮して一定の評価を得た医師に、「Best Doctors（名医）」という称号を授与しているアメリカの会社がある。一九八九年にボストンで設立されたBest Doctors, Inc.社だ。

日本では、一九九九年から株式会社法研が代理店となって二年に一度調査し、「Best Doctors in Japan」の称号を授与している。今年は全国で五三〇八名の医師が選ばれ、当グループからも多くの医師が選出されている。これまでに当グループから選出された医師をご紹介する。（一部、掲載辞退の医師を除く）

●国際医療福祉大学病院
産婦人科部長　大和田倫孝教授

●国際医療福祉大学塩谷病院
麻酔科部長　加藤正人教授

●国際医療福祉大学三田病院
がん治療研究センター長　北島政樹学長
病院長、心臓血管センター長　小川聡教授
頭頸部腫瘍センター長、頭蓋底外科センター長　鎌田信悦教授
神経内科部長、リハビリテーション科副部長　武田克彦教授
心臓血管センター　渡邊剛客員教授
耳鼻咽喉科　加我君孝教授
女性腫瘍センター・婦人科　福地剛准教授
外科・消化器センター　出口倫明講師

●国際医療福祉大学熱海病院
病院長、移植外科　寺岡慧教授
上席副院長、医療局長、皮膚科　池澤善郎教授
消化器センター内視鏡部長　竹下公矢教授
消化器内科　北洞哲治教授
皮膚科　佐々木哲雄教授

●山王病院
病院長、リプロダクション・婦人科内視鏡治療センター　堤治教授
リプロダクション・婦人科内視鏡治療センター長　藤原敏博教授
外科副部長　高尾良彦教授
内科　足立満教授

●化学療法研究所附属病院
副院長、呼吸器外科　小中千守教授
消化器内科内視鏡部長　天野祐二教授
消化器外科部長　山田英夫教授

●福岡山王病院
病院長、産婦人科　中村元一
予防医学センター、肝臓・胆のう・膵臓内科　石橋大海教授
ハートリズムセンター長　熊谷浩一郎教授
消化器内科部長　小林広幸教授
整形外科部長　副島修教授
外科部長、地域連携副部長　平田敬治准教授

（東京事務所　広報部）

トピックス

大田原市長と留学生の懇談会

一〇月二九日、津久井富雄大田原市長と国際医療福祉大学大田原キャンパス在学中の外国人留学生との懇親会が大田原市のカシマウェディングリゾートにて開催された。

本学の一、二年生は大田原市外国人留学生奨学金を受給している。この度、この受給留学生九名（中国人四名、韓国人三名、モンゴル人二名）が大田原市長からお招きを受け、お話しする機会をいただいた。市長の温かいお心遣いのおかげで、終始笑顔で留学生活や母国についての話に花を咲かせ、異国での留学生活を気遣う市長の励ましの言葉にどの学生も大いに感激した様子だった。

留学生に対する津久井市長及び大田原市のご厚情とご支援に感謝いたします。

（国際室　森島公美）

JICA本邦研修を大田原キャンパスで受け入れ

JICAプロジェクトの一環である「中核人材養成（応用コース）」を昨年の一〇月一八日～一一月二二日、本校にて実施した。中国リハビリテーション研究センター、中国の医療機関（重慶、西安）より九名の医療従事者が大田原キャンパスを訪れ、約六週間に渡る研修を受けた。

丸山仁司保健医療学部長を中心に、種々の研修プログラムを組んだ。例えば、国際医療福祉大学クリニック言語聴覚センターでは、聴覚障害児等の言語・コミュニケーション指導や両親支援に関する臨床を見学し、介護老人保健施設マロニエ苑では、日本の介護保険制度やリハビリ業務についての講義を受けたり、リハビリスタッフと療養病棟スタッフ間の職種間連携の模様を見学したりした。

中国は労働災害や交通事故の増加によりリハビリテーション人材の養成が急務となっており、本学はこれまでも、多数の教員の派遣や同センターの研修員の受け入れを通じて、同国の医療技術向上に協力している。

（国際部　加藤剛太）

元培科技大学（台湾）の留学生が視機能療法学科に！

本年度、後期授業期間（平成二四年九月中旬～平成二五年一月初旬）に台湾の元培科技大学視光系学科の三年生二名が短期留学生として籍を置き、学科学生とともに視機能や高次脳機能に関する専門科目を学びました。留学生の受け入れは本学科としては初めてのことであり、お互いの意思疎通が十分にできるのか不安もありましたが、国際室の手厚いサポートに加え、何より留学生本人の学修に対するひたむきな姿勢と本学科の学生たちの活発なコミュニケーション力により、講義、実習ともに円滑に実施することができました。

その中で、台湾と日本での視機能に携わるセラピストの教育システムの相違や考え方の違いを垣間見ることができ、学生のみならず教員にとっても、学びの多い有意義な毎日となりました。

●留学生と交流会実行委員

昨年一一月には国際室のご協力の下、学生自らが企画した交流会には百名を超える学生と教職員が参加し、日本と台湾に関するクイズを通じて楽しく学んだり、アカペラサークルによるコンサートも催され、和やかな雰囲気の中で親睦を深めることができました。そして、彼らとのコミュニケーションで最大の力を発揮したのが書字としての「漢字」であったことも印象深いことの一つです。留学生にとりましても学科にとりましても、有益で価値ある国際交流となりました。

（視機能療法学科　講師　内山仁志）

国際交流親善パーティ

毎年恒例の国際交流親善パーティーが一二月五日に大田原キャンパス那須アスリーナ二階の学生ホールで開催された。

当日は永山 林大田原市副市長、後藤秀雄大田原市国際交流会会長、アジア学院大津健一校長並びにアジア学院の学生の方々、北島政樹学長、杉原素子副学長、佐藤禎一学事顧問はじめ本学教職員、大田原キャンパス留学生など、総勢百名以上の方々にご参加いただいた。

本学茶道部の学生によるお点前披露、交響楽部によるクリスマスソング演奏、留学生による母国の文化紹介などで会場は大変盛り上がりを見せた。教職員による留学生の着物着付け体験も女子留学生に大好評で、会場のあちこちで写真を撮りあっている姿が見られた。

当日ご参加いただきました方々及び、開催・運営にご協力いただきました関係各位に深く御礼申し上げます。

（国際室　森島公美）

第一五回 学長杯 英語スピーチコンテスト開催

一二月一〇日、大田原キャンパスにて学長杯英語スピーチコンテストが開催され、「国際」、「医療」、「福祉」をキーワードに四組の研究発表が行われた。いずれの発表もパワーポイントの文言、発表言語には英語が用いられた。開会のあいさつでは北島政樹学長が、震災から立ち上がろうとする現在の日本の現状や、最先端の医療に関して流暢な英語で熱く学生たちに訴えかけた。

医療福祉・マネジメント学科一年の大山泉さんは、「Medical Tourism」と題してアジアの医療ツーリズムの現状と日本での普及に向けた今後の展望について述べた。一年生とは思えない堂々とした発表だった。

看護学科二年の神長寿美佳さんは「In the Past and Future of Midwives in Japan」と題して日本における助産師の歴史と現在の助産師の役割について発表した。栃木県北部の郷土史にも注目した興味深い発表であった。

言語聴覚学科二年の荒井美香さんは「Kangaroo Care」のタイトルの通り、近年日本でも注目を集めているカンガルーケアについて発表した。親子の結びつきを深めるカンガルーケアが幼児虐待の防止につながるという独自の視点を紹介した。

最後に、薬学科三年の本木絵梨奈さんと小島佳奈さんが、「The Possibilities of Umami」と題して、日本人が発見した第五の味覚である「うまみ」について発表した。医療目的でのうまみ利用に関する先行研究の紹介、実際の医療目的での利用に向けた提案など、薬学部の学生らしい素晴らしい発表であった。

審査員に、北島学長、菊池哲郎総合教育センター長、北村義浩国際交流センター長、中田健吾先生、G.C.コータ先生を迎え、オーディエンスによる投票も実施した。その結果、優勝は本木さんと小島さんの「The Possibilities of Umami」、準優勝は荒井さんの「Kangaroo Care」が選ばれた。特別ゲストとして日本語でのスピーチを披露してくれた留学生のサンドウイさん、レイさん、リ・ケンワさんを含めた全ての発表者、また司会の大役を務めた医療福祉・マネジメント学科の増田弥生さん、薬学科の池田英美さん、陰でコンテストを支えたボランティア学生たちの努力と勇気をここに称えたい。

●優勝した本木さんと小島さん

（総合教育センター語学教育部　齋藤智恵）

継続する被災地支援活動 ～東日本大震災を忘れない～

仮設住宅ボランティア

一一月二五日と一二月二七日に、原発事故で避難している方々が暮らす福島県郡山市若宮前応急仮設住宅にてボランティア活動を行った。

一一月の活動では、同住宅で開催された『ちっちゃな・えびす講市』に屋台を出店、学生・教職員計一八名が参加し、スープ餃子二〇〇食の販売と大田原名産にっこり梨の無料配布を行った（売り上げは全額地元に寄付）。

●スープ餃子を販売する学生

一二月の活動では、大田原市の無形民俗文化財「福原もちつき唄保存会」の参加も得て、『元気もちつき大会！』を開催。その場でついたお餅と、学生達が調理した豚汁を振る舞った。一二月は学生・教職員計三三名が参加。一一月に引き続いて参加した学生も多く、住民の方に顔を覚えてもらえている学生も多かった。

●福原もちつき唄保存会のみなさん

どちらの活動でも、仮設住宅の住民の方々とゆっくりお話しができ、日頃のご苦労や生活上の課題などの一端を知ることができた。住民の方々からの「また来てね」、参加した学生の「次回はいつですか」という声を受け、今後も継続的にできる活動を行っていきたい。

被災地応援グッズの販売

一二月一七日～二一日の計五日間、IUHWボランティアセンター内にて、被災地応援グッズの販売を行った。

被災された方々が作った、ミサンガや缶バッジなどのグッズ販売を行うことで、被災地を支援しようと、『とちぎ学生未来創造会議　県北支部』の学生達が中心となって企画・実施した。

計七種類の商品を取り扱い、五日間で一五〇名を超える人が訪れ、合計一三万二七五〇円の売り上げとなり、全額を被災地支援に送金した。企画した学生からは、今後は地域のイベント・行事等での販売も行っていきたいという声が上がった。

●気仙沼市唐桑の大漁旗デザインのてぬぐい

●女川町で制作したさかなの形のキーホルダー

（ボランティアセンター　中里愛）

第三六回 日本高次脳機能障害学会を開催 「研究と臨床の統合：未来への展開」

大学院言語聴覚分野専攻主任の藤田郁代教授が大会長を務め、一一月二二日・二三日の両日、栃木県宇都宮市の栃木県総合文化センターにて、第三六回日本高次脳機能障害学会（旧日本失語症学会）を開催した。この学会は高次脳機能とその障害の研究の発展、臨床の向上、新しい知見の普及など幅広い活動を行っており、会員は医師、言語聴覚士、作業療法士、臨床心理士等で構成される。三六回の歴史の中で、医師以外で大会長を務めたのは四人目であり、その内一人は初代言語聴覚学科長の笹沼澄子名誉教授である。

●大会長を務めた藤田郁代教授

今大会は「研究と臨床の統合：未来への展開」をテーマに掲げ、日本全国から一六四四名が参加し、二七六題の一般演題が発表された。会長講演では、「日本語の統語障害」について話され、大ホールはほぼ満席の大盛況であった。また、Nina F. Dronkers教授（カリフォルニア大学）をお招きし、「文の聴覚的理解を支える脳領域の構造的・機能的結合」について講演いただき、シンポジウムでは「進行性失語」と「ノンバーバル　コミュニケーション」を取り上げ、パネルディスカッションとして「統語処理の障害」を企画した。いずれも興味深い内容であり、講演後のディスカッションは大いに盛り上がった。

●講演するNina F. Dronkers 教授

言語聴覚学科教員および関連施設の言語聴覚士八名が発表の機会を得、この発表・質疑応答を通して、今後の研究の方向性に多くの手掛かりや手応えを感じることができた。

授業がなかった四年生は両日、一～三年生は二三日のみの参加であったが、着馴れないスーツに身を包み、抄録片手に学会場を右往左往しながらも、熱心に勉強する本学学生の姿があった。内容は理解し難い部分も多くあったと思うが、障害を持つ方が自分らしい生活を送れるよう、専門職として弛まぬ努力を続ける姿、生涯学習している実践の場を体験したことは今後の大きな財産となることだろう。

言語聴覚学科は大会事務局として関わり、当日は大学院生および終了生、本学科四年生の協力を得て運営にあたった。

朝早い集合であったのにも関わらず、誰一人として遅刻することなく、来場者を親切に温かく迎えることができたことは、大会成功への大きな役割を果たした。

（保健医療学部　言語聴覚学科助教　佐藤妙子）

第三回 「共に生きる社会」めざして 高校生作文コンテスト表彰式開催

本学と毎日新聞社が共催で開催している「『共に生きる社会』めざして高校生作文コンテスト」は三年目を迎え、昨年一一月一〇日、大田原キャンパスにて入賞者の表彰式が行われた。

●記念写真に収まる受賞者と審査委員

今回は、過去二回のコンテストの応募数を上回り、全国から二二三二点の作品が寄せられた。本コンテストの認知度が徐々に上がっていることを感じる。たくさんの応募の中から、一次審査、最終審査を経て、最優秀賞一点、優秀賞二点、佳作二点、入選五点、また、学校賞として八校が選ばれた。

表彰式当日は爽やかな秋晴れに恵まれた。式典の前に、「日本の医療を考える～これまでの医療・これからの医療」というテーマで金澤一郎大学院長の特別講演が行われ、地域住民の方々をはじめ、本学在学生が大勢会場に詰めかけた。さまざまな観点で語られた日本の医療の現実や問題提起についての講演は、医療従事者をめざす学生にとって大変貴重な機会となった。

表彰式は、最優秀賞、優秀賞、佳作に入賞した五名の高校生およびその保護者と担当教諭、また、学校賞を受賞した高校の教諭を招待して行った。北島政樹学長の主催者あいさつ、毎日新聞社の作品講評に続き、北島学長から各受賞者に賞状などが贈られた。

最後に、最優秀賞・優秀賞を受賞した高校生による作文朗読が行われた。自らの体験を通し、感じたとまどいや喜び、または怒りや悲しみをも含め、高校生の率直な思いが伝わる内容であった。同時に、偏見や差別などの問題に真正面から向き合い、熟考を重ね、自分なりに答えを導きだし、さまざまなことを学んでいく姿は聴衆に感動を与え、会場は大きな拍手に包まれた。

入賞した五名の高校生は、三月下旬に、本学の提携機関である「中国リハビリテーション研究センター」などを訪問する中国医療福祉体験ツアーに出発する。

（東京事務所　広報部）

卒業生通信

二〇〇六年四月に六年制薬学部の第一期生として本学に入学し、二〇一二年三月に薬剤師国家試験に見事合格。卒業後、薬局に就職して活躍している、タイ国費留学生のソムチャイさんにインタビューしました。

日本で薬剤師の経験を積んで、将来は母国のタイで活躍したい

■薬局勤務　ソムチャイ（タイ国費留学生、新宿日本語学校出身）

●薬剤師を志したきっかけは？

親戚に薬剤師がいたので、小さい頃からなりたいと思っていた職業のひとつでした。高校でも好きな科目は生物と化学でした。

高校を卒業した一八歳の時に、タイの国費留学（英語圏以外の国での語学・知識習得）の公募に合格して、二〇〇四年十月に二〇人の仲間といっしょに日本にやってきました。初めての日本での生活は、東京の高田馬場にある新宿日本語学校で一年半、日本語を中心に勉強して大学入学に備える日々でした。

●本学を留学先に選んだ決め手は？

商学部など薬学部以外の学部も受験しましたが、ちょうど薬学部が六年制になる記念すべき年だったので、その第一期生になることに新鮮さを感じました。そして、その中でも国際医療福祉大学は対応がたいへん親切で、尾能先生や渡邊先生がわざわざ東京まで来られて、丁寧に学部の説明をしてくださったことが入学の大きな決め手となりました。

●本学で学んで良かったことは？

薬学部のある栃木県の大田原キャンパスは、何といっても勉強に集中できる環境が整っていることが最大の魅力でした。普段の学部の講義や角南先生の指導のもとで行った論文研究は特に苦に感じたことはありませんでしたが、外部講師による薬剤師試験対策の授業はたいへん厳しかったですね。

サークルには入りませんでしたが、二年生から六年生の初めまで、プールの監視員のアルバイトを続けたことも思い出に残っています。

●後輩にアドバイスを

薬剤師国家試験は決して簡単ではありませんが、先生方の熱心な支援もありますので、努力すれば勉強もなんとかなります。ひとつひとつ、目の前の試験をクリアしていくことが、最後には薬剤師国家試験の合格に結びつくと思いますので、日々の努力を怠らずに、あせることなく着実に実力をつけていってもらいたいと思います。

●現在の仕事について

卒業後は、お客様の相談に直接お応えしながらセルフメディケーションのお手伝いができる仕事をしたいと思っていましたので、薬局への就職を選びました。現在は、神奈川県秦野市内の店舗でOTC（一般用医薬品）の相談・販売の業務を中心に、薬局のさまざまな業務や接客方法、経営等を勉強しています。秦野は静かで生活環境が良く、なんだか、大田原市に似ていると感じています。

●これからの夢は？

薬剤師の資格を活かして、今後は処方調剤などの業務も経験していきたいと思っているところです。数年後にはタイに戻って、母国で活躍することが夢なので、この夢に向かって、日本で幅広く薬剤師の経験を積んでいきたいと思っています。

留学生の進路について >> 日本のさまざまな病院・施設や企業で活躍しています。

国家資格の取得

本学留学生は、就労ビザが認められている薬剤師、看護師、理学療法士等医療福祉関連の国家資格に数多く合格しています。

合格実績

・薬剤師	1名
・看護師	8名
・理学療法士	20名
・作業療法士	3名
・診療放射線技師	2名

（2012年3月末までの累計数）

日本での就職

本学を卒業した留学生62名のうち27名が日本の医療機関等に就職しています。また、就職後、キャリアアップをめざして働きながら本学大学院へ進学する方もいます。

主な就職先（グループ病院・施設は除く）

・黒須病院（栃木）
・那須赤十字病院（栃木）
・温泉研究所附属沢渡病院（群馬）
・上尾中央総合病院（埼玉）
・至誠会第二病院（東京）
・松戸整形外科病院（千葉）
・長野市民病院（長野）
・東京工科大学（東京）
・アースサポート株式会社
・医療法人大那（栃木）
・矢板南病院（栃木）
・社会福祉法人芳香会（茨城）
・国立がん研究センター中央病院（東京）
・武蔵野陽和会病院（東京）
・横浜旭中央総合病院（神奈川）
・藤田保健衛生大学病院（愛知）
・株式会社ブリヂストン
・株式会社クリエイトエス・ディー

（2012年3月末までの実績）

IUHW Graduate School Information

国際医療福祉大学大学院

2013年度 入学生募集中
学内推薦入試制度あり

医療福祉専門職として活躍中の卒業生のみなさん、
大学院でさらなるレベルアップをめざしませんか（本学卒業生は入学金が免除になります）

「働きながら大学院で学びたい」社会人が学びやすい3つの特長

①キャンパス　大田原、東京青山、小田原、熱海、福岡、大川に6つのキャンパスを開設しています。

②カリキュラム　多くの授業を平日の夕方以降と土曜日の昼間に行っています。

③同時双方向遠隔授業　複数のキャンパスで授業をリアルタイムで受講できます。質問やディスカッションといった同時双方向のコミュニケーションも可能です。

TOPICS　文部科学省の「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン」に基づく新コースを4月開講

文部科学省が2012年度から実施している「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン」に、慶應義塾大学を中心に本学を含めた10大学が参画する「高度がん医療開発を先導する専門家の養成プログラム」が採択されました。
本学の「がん先端医療に対する多職種連携重点コース」（博士課程、4月開講）では、異なる専門領域の学生が共にがん先端医療の実際を学び、それぞれの専門分野での治療計画の策定を協同して行うことができる専門医療職の養成をめざします。
ご関心のある方は、大学院のHPをご覧ください。**http://www.iuhw.ac.jp/daigakuin/ganpro/index.html**

大学院入試に関するお問い合せは入試事務室まで（TEL：0287-24-3200）

学べる！役立つ！究める！動画サイト。医療・福祉・介護のエキスパートのあなたへ

医療福祉eチャンネル http://www.ch774.com　好評配信中

主な配信番組

●理学療法分野
第47回日本理学療法士協会全国学術研修大会(鹿児島)

●作業療法分野
2012作業療法フォーラム、第51回作業療法全国研修会（岩手）

●言語聴覚分野
摂食・嚥下リハビリテーションの実際

●介護・福祉分野
医療福祉の転換～地域包括ケアシステムの構築へ～
自立支援型ケアマネジメント・自立支援介護2012

●医療・福祉・経営実務
地域連携コーディネーター養成講座2011

●受験講座
※介護福祉士国家試験実技試験対策DVD
(全2巻10,500円)　好評発売中!

●厚生労働省情報
障害保健福祉関係主管課長会議
(2012/10/22開催) ※無料配信

お問い合わせは　フリーダイヤル　0120-870-774　医療福祉eチャンネル お客さま係（月曜～金曜 9:00～17:00）
Eメール　info@iryoufukushi.com　〒107-0062 東京都港区南青山1-3-3 青山一丁目タワー4階

e internet Health & Welfare

学生向け動画配信サイト OPEN!　「国際医療福祉大学VODライブラリー」http://www.ch774.com/student.php

主な配信番組
●大学授業・副教材
心理学、教育学、ボランティア論、生命倫理、医学・医療史、トップクラス講義、関連職種連携論、PT動作分析論、生理光学、公衆衛生看護活動、産業看護の基礎、視能訓練学I、等

広報誌 IUHW 92 号

発行：学校法人 国際医療福祉大学

〔大田原キャンパス〕広報委員会
栃木県大田原市北金丸2600-1　☎0287-24-3000
〔小田原キャンパス〕
神奈川県小田原市城山1-2-25　☎0465-21-6500
〔福岡天神キャンパス〕
福岡県福岡市中央区長浜1-3-1　☎092-739-4321
〔大川キャンパス〕
福岡県大川市榎津137-1　☎0944-89-2000
編集：大田原キャンパス広報室　☎0287-24-3210
デザイン：野佐デザイン

医療福祉の多彩なエキスパートを育てる。
国際医療福祉大学
http://www.iuhw.ac.jp/

©国際医療福祉大学2013　Printed in Japan　禁無断転載・複写

先輩に聞く 国家試験受験の傾向と対策

PART 2

昨年に続いて今年で2回目。「学生が学生に取材する」をコンセプトに、
後輩が先輩に国家試験対策についてインタビューしました。
受験を目前に控えた4年生から来年は同じ状況を味わっている3年生に、
この1年間の過ごし方を伝授します

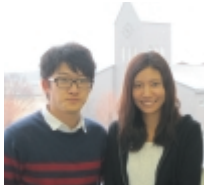
保健医療学部 看護学科 School of Health Sciences／Department of Nursing

回答者　4年生

細野佑磨さん(左)
群馬県・高崎健康福祉大学高崎高校出身

平林隼雄さん(右)
長野県・松商学園高校出身

保健師国家試験
2013年2月15日
看護師国家試験
2013年2月17日



インタビュアー　3年生

丸翔二郎さん
東京都立芦花高校出身

児玉衣里さん
栃木県立宇都宮中央女子高校出身

Q 看護学科は看護師と保健師がありますが、国試対策はいつから始めたらいい？

平林　4年生の前期に保健師の授業があるから、まず保健師の勉強をやってしまう。実習が終わったら気持ちは看護師に向かっていくから、夏休みくらいから頑張れば…。
細野　早く始めるなら、3年生の3月の模試が終わってから。早く点数が取れるようになってみんなに差をつけられるし、自信にもなる。後半に追い上げられるプレッシャーもあるけど。

Q 具体的にどんな勉強をしていますか？

平林　とりあえず必修科目を。得点が8割いかないと足切りがあるし、必修をやると一般科目も伸びるしね。
細野　うん。解答を見て、自分なりにまとめたりしていると1問で1時間くらいかかる。そういう時期が1～2か月続いた。
平林　大学受験と違って、国家試験は全部関連しているからその点はやりやすい。

Q 実習と就職活動と勉強のバランスは？

細野　就職活動は早い段階で終わらせるほうがいい。5～6月に始めて、7～8月には決まっている人が多い。

Q 就職する病院を決めた理由は？

細野　大学院に行きたいのと、がん看護をやりたいということ。
平林　僕も大学院に行きたいから大学病院に。人それぞれで、インスピレーションで決めてしまう人もいるし、地元に帰る人もいる。

Q 普段の気分転換はどんなふうに？

平林　国試勉強をやらない日を決めたらその日は全然やらないくらいのメリハリをつけている。それと、モチベーションを維持するために、友だちといっしょに勉強している人は多い。

Q 最後に、受験までに気をつけることは？

平林　夜型より朝型の生活リズムにする。
細野　そうそう。
平林　10時くらいに寝て、6～7時に起きる。
細野　試験時間に合わせて勉強している。9時に始めて12時まで。食事をはさんで、1時に始めて3～4時までというふうに。

ここでインタビュアーのふたりも「そうそう」と大きく頷いて納得。役に立つアドバイスでした

インタビュー 2012年12月17日

保健医療学部 作業療法学科 School of Health Sciences ／Department of Occupational Therapy

回答者　4年生

笛木沙織さん(左)
新潟県立巻高校出身

山田愛さん(右)
秋田県立大館鳳鳴高校出身

作業療法士国家試験
2013年2月24日

インタビュアー　3年生

柳沼沙也佳さん(左)
福島県立郡山東高校出身

山上夏紀さん(右)
山形県立山形北高校出身

Q 国試の勉強はいつから始めましたか？

笛木　4月に模試が始まってから。
山田　私も。ただ、3年生の夏休みに、解剖学・生理学だけは過去問に触れたりしていた。
笛木　どこから手をつけていいかわからないから、3年生から始めるのは難しいかもね。

Q 実際の勉強方法は？

山田　最初はどこが苦手なのかもわからないから、まず過去問を解くことから始めた。
笛木　そう。前期にグループで過去10年分の過去問を作って、とにかく解いてみた。そこでできないことを「苦手ノート」にしてみた。
山田　まず解いてみないとどうしようもなかったよね。

Q プリントを切り貼りしたと聞いています

笛木　そうしてみんなで問題集を作ったり、過去問を分類ごとにファイルしたりしたけど、10年分だから意外と終わらないんだよね。

Q 1日のスケジュールは？

笛木　前期は空き時間に、友だちとノートを広げたり、ディスカッションのようにやったり。
山田　きっちりとは決めなかったけど、国家試験の勉強と他の勉強の時間を区切るようにしていたので、自然にメリハリがついていたかも。
笛木　前期は自分に合った勉強法を見つける時期かもしれない。

Q まとめ方のコツはありますか？

笛木　先生に言われて臓器のイラストを描いてみたりしています。丸暗記でもいいんだけど、自分の身体を使うとすんなり覚えられる。
山田　これまで座学で学んできたことをまとめるというより、過去問をまとめるという感じかな。そこに枝葉をつけていく。

Q これから本番までの勉強は？

山田　模試の直しをしていると、何度も間違えるところがわかるし、直接関係なくても気になるところが出てくるので調べておく。ただし、深追いし過ぎないことも肝心ですね。

Q 国家試験が終わったら？

笛木・山田　旅行を計画中です。

知識のまとめ方が気がかりだったインタビュアーにとって、大いに参考になる経験談でした

インタビュー 2012年12月26日